

エスニシティとネーションのはざまで： タイ・マレーシア国境地帯の Thai-speakers

黒田 景子

はじめに

前近代の東南アジア国家と社会を説明するときに、しばしば用いられるキータームはその「フロンティア」性と、中心となる政治・行政権力の地方掌握度の低さである。多くの国家がしばしば近代的な意味での明確な国境線というものをもたず、あるいはその国境は理論的に固定されないと説明され、その伝統的な国家論モデルとして、ウォルタースのマンダラ国家やタンバイヤの銀河系政体というモデルが提示されてきた。

ギデنزが『国民国家と暴力』の序章において「伝統的国家」と「国民国家」を以下のように規定している。すなわち、「伝統的国家」はその時代の交通通信手段の性格に規定されて、あるいは国家の重要な統治活動である査察活動が制限される結果、中央の政治中心が全体を統一的に統治することが困難である。そのために中央が直接統治できる空間的地域は限定され、地方の政治勢力の独自の統治能力に依存する度合いがまし、政治的な辺境 (Frontier) が存在する。そして、国民国家の主権概念によって規定されるような国境 (Border) はいまだ成立していなかった、とする。

また、「国民国家」はその発達過程のなかで、伝統的国家にとって基礎的な都市／田園地方の諸関係を分解し、国境と連結された高い強度の行政的秩序の出現を包含する。さらに、国民国家は他の国民諸国家とのシステムの諸関係の中でのみ存立すると規定する。[清野：81, Giddens：12-15]

この意味において、東南アジアの国家は植民地統治を直接にあるいは間接に経験することで、ほぼ200年の間に、「伝統的国家システム」から「国民国家システム」へと、急速に変貌をとげてきたのである。

本稿で扱う、ケダー州は、現在の北部マレーシアにあって、タイと国境を接している。その歴史的経験としては、伝統的国家としてのシャムのまさに辺境に位置し、シャムの辺境統治機構である朝貢国としての永い政治的経験を持ち、仏教国シャムに「属する」イスラム小国であった。

また、この辺境地帯は社会としてのフロンティア性をも濃厚にもっている。ここでいう「フロンティア」性とは、「二つないし複数の集団が、ある『場』で遭遇し、そこに共存したときに形成される、かれらの出身地とは明白に異なった空間として」とらえられるフォーブズ (Forbes) の「集団的状况」をさす。フロンティア空間としてのケダー世界は、15世紀以来のイスラム指導者、スルタンをいさきながらも、その内部に実にさまざまな多民族状況をかかえてきた。とくにここで、筆者が対象として取り上げたいのは、サムサムとよばれる Thai-speaking Muslim の集団と、シャム人の集団である。かれらはいずれもマレー・イスラム国家の中にあるながら、その国家の概念的上部機構であるシャムの文化的影響力を内包した集団である。かれらの過去200年の歴史的経験は、伝統的国家システムからケダーが「国

民国家」マレーシアへと変貌をとげる過程で、辺境がいかに変貌をとげてきたかという歴史的経験でもある。

本稿は、これらの辺境地域が経てきた歴史的経験をできるだけ村落レベルからの歴史として再構築することを試みたものである。また、本稿は文部省科学研究費の援助により行った、1991年から2年にわたる断続的な文献資料収集と村落調査によるききとり資料を基礎としている。

1. 「非領域国家」としてのケダー伝統世界

前近代の東南アジア諸国の国家構造のもとでは、中央と地方、さらにその下部構造の地方首長と辺境との関係はそれぞれ分節的であり、たとえば、中央宮廷と辺境の首長の間には、相互の関係概念の中では「上位にたつもの」と「下位にたつもの」の関係として捉えられるが、その実際的な関係は「名目的支配」というまでに希薄である。この両者間ではしばしば近代的な意味での「統治」概念規定に重要な意味をもつ直接の定期的な徴税組織は存在せず、ときに上位者＝中央の下位者＝辺境支配の意味づけと、下位者＝辺境からの上位者＝中央への役割の期待がすれちがったまま同時に存在することも可能であった。

すなわち、20世紀以前のシャム諸王朝にとって周辺部の朝貢国は「支配される国々」として位置づけられていたのに対し、ここでいうマレー半島部の朝貢国ケダーにとっては、「シャムとの伝統的關係はそのときどきの現実の力関係を反映してはいるが、基本的には戦時の相互友好保障関係」としてとらえることが可能であったのである。両者の関係が直接に精算されるようになったのは、「国境線」を明確に規定することで国家領域を面的に規定する英国の植民地政策がこれらに直接に関与するようになった20世紀はじめのことであった。

また、国家概念的に近代的な意味での国境線をもたない前近代の東南アジア国家の構造は、中央と地方、さらにその下部構造の地方首長と辺境との関係を面的ではなく点と線のつながりとして理解することが容易である。

そしてそれを概念ではなく、現実の地形構造、交易ネットワーク構造に展開すると、たとえば、以下のような政体が想起される。筆者が念頭におくのは18世紀に東南アジア島嶼部に存在した政体である。

すなわち、この政体は河川とその流域の支配を中心として成立している。王国の基本経済は王とその一族による対外交易とそれにかかわる利益である。カティリタンビィ＝ウェルズのいう港市政体（Port-Polity）がその典型的なモデルである。この港市政体は、成立条件から地方交易ネットワーク（Local Trade Network）の一端として機能しているが、同時にそれを含むより広い地域交易ネットワーク（Area Trade Network）の動向に左右される。ネットワークが不安定である場合は王国の中心も可動的である。内陸部にも王国の民は存在するが、支配に係わる中心は交易活動とむすびつく沿岸・河川部が主導的である。内陸においては開墾空間が少なく、「フロンティア」状態である。すなわち、住民の移動は顕著におこるが、その理由は積極的な開墾移民や、戦乱を避ける難民としての移住もあり、その可動性ゆえに国境圏自体が、アメーバのように拡大・縮小し変形する。そして、中心である港市にも周辺の農村部にも多数の民族集団を内包することが可能である。このような政体の例としては、マレー半島西北海岸部の港市「タラン（Thalang：現在の南部タイのプーケット県、パンガー県、タクアバ県を総称する伝統的、歴史的呼称）」がもっとも容易に思い浮かぶ。[黒田：1991]

本稿で扱うケダーはタラーンのさらに南の地域にあり、よく似た構造と規模をもっており、より具体的には以下のような構造を示す。

(1) Riverine System からみたケダーの構造

史書によれば、政体としてのケダーの起源は12世紀ころにさかのぼるとされる。考古学的な成果によれば、現在のマレーシア・ケダー州南部ムダー地域のグライ山 (Gunung Gerai) の裾野で発掘されているインド文明の影響をうけた遺跡群は、このムダー河川地域が11世紀から14世紀にかけて重要な交易地点であったことを示している。

史書「*Salasilah atau Tarikh Kerajaan Kedah*」によれば、ケダーの政体は現在までに王宮を9度移転したとされる。このうち、イスラムを受容する以前の12世紀から14世紀にかけての王宮はムダ (Muda) 川の河口にあり、14世紀から17世紀にかけてはプルリス (Perlis) 川とケダー (Kedah) 川の中間の地域を転々とし、18世紀以降は現在のケダー州都でありケダー川沿いのアロスター (Alor Setar) に落ち着いている。

川筋の支配という点からケダーの統治圏をみれば、18世紀末までのケダーはおおむね4つの川筋の支配を基礎としている。その4つの河川とは北から、

- 1) サトゥーン川 (Sungai Satun),
- 2) プルリス川 (Sungai Perlis),
- 3) ケダー川 (Sungai Kedah),
- 4) ムダー川 (Sungai Muda),

であり、14世紀以降の王宮が2)と3)の流域に集中していたことから、ケダーの中心支配圏は3)を中心として現在の州境と国境をより北にひろげ、現在タイ王国に属するサトゥーン (Satun) 県をも含む地域に及んでいた。サトゥーンは19世紀半ばの政治的な対立によってシャム王国の政治的影響下におかれるまではケダースルタン一族の血縁者の支配地であった。19世紀初頭段階でのケダーとシャムの勢力の境界地域はラゲー (La-ngu) からトラン (Trang) を含む地域をあいまいに指しており、ケダー勢力の北方面への最大の伸長は、18世紀末にタラーンを一時的に占領したものである¹⁾。

シャムとの関係からいえば、ケダーがシャムの朝貢国構造の中に組み込まれたのは、イスラム化以前であるとされる。シャムの統治構造は典型的なマンダラ型概念を有しており、その中で朝貢国はもっとも辺境にある。その関係は、朝貢国からの定期的なブンガマス (金銀樹) の貢納と戦時の協力体勢、タイ名の官職名の授与という以外は、基本的に極めて名義的形式的なものであるといわれている。朝貢国を実際に監督し、貢納品の移送の警備や、監視をつかさどっているのはシャムの国家構造の中で最高位の地方国である一級国であり、18世紀末までのアユタヤ朝シャムにおいては、ナコンシータマラート (Nakhon Sii Thammarat) が南部唯一の一級国として長らくその任にあった。

アユタヤ末期においては、ナコンシータマラートの管轄する朝貢国は、東海岸部のパタニ (Pattani)、トレンガヌ (Trengganu) と西海岸のケダーに加え、その中間点に位置するパタルン (Phatthalung) であり、18世紀後半に漳州華僑が支配者に任命されるソングラー (Songkhla) ははじめパタルン、後にはナコンシータマラート属下の小国であった。また、タラーンは西海岸部の港市として概ね中国系と思われる支配者 (国主) のもとにあって、ナコンシータマラートに軍事的援助を受ける立場にある二級国であった。

ナコンシータマラートが仏教を奉ずるのに対し、これらの朝貢国は18世紀半ばの段階です

べてがイスラム国であったという特徴をもつ。しかしながら、パタルンは1748年に国主が仏教徒に改宗したという記事があり、このことは当地域がシャム仏教勢力とマレームスリム勢力の境界領域であって、住民にそのいずれもを含んでいたことを示す。パタルンの国主の一族は、ジャワ出身のマレー系ムスリムを祖先とし、アユタヤ時代の17世紀には、東海岸のサティンプラを首都としていた [Sii Woorawat]

アユタヤ末期においてパタルンは東海岸の東海岸のソクラー、チャナ (Cana)、テーバー (Thepha) というパタニに繋がる三つの小国と、西海岸のラゲーと接するパリエン (Palien) を属国におき、シャムの南部の城砦都市とでもいうべきナコンシータマラートとケダー、パタニの間の「あいまいな」領域をうめるかたちで存在していた。

この時期のナコンシータマラート南部からパタルン・ケダーを占める地域の開墾の状況については、東海岸部のサティンプラ周辺の堆積海岸地に大規模な水田灌漑遺跡が見られるのに対し [Stargardt : 129], マングローブ湿地帯が大半を占める西海岸部の現在のクラビー (Krabi) からケダーのサトゥーン海岸の地域においては、19世紀前半にいたっても漁民や漂流民の集落がわずかに見られる程度の殆ど無人の地であったとの記録があり、内陸部の開墾が進んでいたとはいいがたい。ケダーにおいても18世紀始め以来首都となったアロー・スター周辺の平坦なケダー平野においては米の十分な生産が見られたと記録があるが、ケダー平野の水田耕作のための開墾は18世紀も後半になって排水運河が完成してからのち、19世紀になってから入植がはじまり、本格的開墾は政治情勢の安定する19世紀後半からであると考えられる。[口羽・坪内・前田 : 30]

(2) Trade Network におけるケダーの位置

政体としてのケダーは、いわゆる典型的な港市国家である。すなわち、支配者であるスルタンとその一族にとっては、交易収入が第一であり、王国と王宮の存在位置とその重心は、港市が属する交易ネットワークのバランスによって選定された。先にあげた、ナコンシータマラートやパタニといった政体も基本的には同じ港市国家として地域の交易ネットワークの一員として意識されており、互いに半島を横断する陸路、あるいは沿岸航路によって結び付けられていた。

交易港市としてのケダーやナコンシータマラート、パタニの存在は16世紀以来、さまざまな記録に残るが、交易ネットワークは時の政体や交易品の流行によってそのバランスが可動的である。

すなわち、歴史的なネットワークバランスの動きを概観すれば、ケダーは、広い意味ではインド洋交易圏の末端にあたるマレー半島西海岸部マラッカ海峡交易圏の北部域に属するが、同時に陸路を介して、東海岸部のシャム湾交易圏ともつながる構造をもっており、シャム湾交易圏は南シナ海交易圏につながっていた。このことは、シャム湾側のナコンシータマラートやパタニ、のちにソクラーにとって、インド洋に面したタラーンやケダーとのつながりが断絶させることのできない重要性を持っていたことを示し、この二つの交易圏のバランスの変化に敏感に対応した行動をとったことを示す。その行動はしばしば実際には地方国主によって決定され、シャム中央が自ら乗り出す前に解決されたのである² [黒田 : 1991]。

2. 18世紀後半から19世紀前半のマレー半島部の情勢

さて、これらの半島部の港市国家群は、アユタヤがビルマによって崩壊した18世紀後半から、20世紀のはじめにケダー等朝貢国群がシャムの伝統的な支配システムから離れるまでの約2世紀の間に、急激な交易ネットワークバランスの変化を経験した。これらの変化は、交易とその交易に携わるシャム、マレー側双方の支配層を主人公とする一連の政治交渉劇を展開させた。ここでは、その過程の詳細を述べることは目的ではないが、特にケダーのネットワークバランスに大きな影響をもたらした19世紀前半までの期間を念頭において概略的に叙述すると以下のようにまとめられる。

(1) 1768年—アユタヤ・ネットワークの崩壊と再生

この時期におこったもっとも大きなネットワークバランスの危機は、1768年のシャム・アユタヤ朝のビルマによる崩壊である。ここにおいて、ナコンシータマラートはただちに半島西海岸から東海岸のひろい範囲に遠征をおこない、独立を宣言した。これは、アユタヤといういわば、シャム湾側交易圏の糸の結び目の消滅をカバーし、それ以前の交易ネットワークを維持するための行動であったと理解できる。事実、交易港アユタヤの空白席にはほどなくトンプリーが置かれ、シャム湾ネットワークの綻びは補修された。

同時に中央のシャム勢力による、アユタヤ時代の支配秩序の回復がはかられ、その中には一端途切れたケダー、パタニ以下マレー系朝貢国との朝貢関係の再開も試みられていた。

(2) 1785年—交易中心ペナンの誕生と、シャムの朝貢秩序の再編成

1785年は、ペナンがライトによって占領され、ここに新しい交易中心が誕生した年として重要である。これは、植民地勢力による政治的位置選定により、ケダー港の南に突如強力な交易中心が誕生したということにほかならず、この交易中心はその経営主体がはじめからインド・英国市場を背負って誕生し、強力な軍隊を維持していたという点で、自然発生的な交易中心とはことなり、圧倒的な保証を有していた。

また、シャムは1785年にはケダー・パタニ・トレンガヌとの朝貢関係を復活させたが、これはいわば、アユタヤ末期の伝統復活にほかならない。しかし1791年に、シャムがナコンシータマラートに加えソクラーを一級国に昇格し、南部の管轄国を二国にしたということは、シャムがビルマ勢力の牽制を意識した防衛体制をとったということと共に、商業交易中心としてのソクラー中国人勢力を重視し、ケダー・パタニに繋がるルートにシャム勢力として参入したということである。なお、パタルンは二級国に「昇格」し、シャムの南方支配構造はさらに南方に伸長した。パタルンがアユタヤ末に把握していた地方はその後、ソクラー、またはナコンシータマラートによって管轄権を奪われ、「シャム化」が進む。

(3) 1809年—ビルマ勢力の南下、侵入

シャムの支配構造を南下させた一つの原因はビルマのマレー半島部への興味である。マレー半島部の人々がビルマの脅威を初めて具体的に認識したのは、1785年のビルマによるナコンシータマラートへの侵入である。これ以降、ビルマは1809年に至るまで、なんとかマレー半島に侵入するが、常にその経路にはタラーン港があった。タラーンは18世紀末までは重要な交易中心として発展しつつあったが、軍事的にはナコンシータマラートにたよらざるをえ

ず、ビルマの侵入に堪えがたかった。

タラーンが徹底的な被害を被りその交易港としての安全性を失ったのは1809年のビルマによる二度の攻撃であった。この攻撃によって、タラーンはその住民を失い、交易ネットワークの重要な中心の地位から転落した。

それに代わって脚光をあびることになったのは、ペナンであり、ペナンに近いケダーである。ケダーの中でもペナンと近いムダ川地方の重要性が俄に注目されはじめた。18世紀末からケダーの王室内では王族の勢力争いが続いていたが、その中で、スルタンに次ぐ地位にあるラジャ・ムダのピスヌは領地であるサトゥーンを不服とし、ムダ地域に領地がえを要求していた。これは、ペナンの発展とともに、ペナンがケダーから借り受けたウェルズレイ地方にも多数の入植者があり、交易の中心がペナンを中心として動きだしたことを示す。

(4) 1811～1839—ナコンシータマラートの南下政策

タラーン港が破壊された1809年は、同時にこの地域における、シャム側の地方勢力の重要な交代期にもあたっている。すなわち、シャム王室の厚い信任をえて急速に発展してきたソクラーの国主ブンファイが1809年に死亡すると、ナコンシータマラートに新国主ノイが即位し、彼の統治期間、ナコンシータマラートは大変に積極的な南方拡大政策をおこなった。その拡大策は、あくまでシャムの統治体系の中に自らを置き、中央王室の中での自らの政治的地位を強化しつつ、交易・政治上のライバルであったソクラーを退けようとしたものであったが、従来のシャムの支配範囲を逸脱した地域に朝貢関係以上に緊密なシャムの影響力を及ぼそうとした点で、アユタヤ期とはことなる。

彼の政策は、トランを軍港・商業港として整備することにはじまり、それを拠点として半島の西海岸部を南下して勢力を伸長することであった。その過程で、ケダーとその南方のペラ(Perak)が具体的にナコンシータマラートの標的にはいり、ケダーはナコンシータマラートによる20年間の直接統治期間を経験することになった。ナコンシータマラートの度重なる南方への進出はペナンの英国によって阻止され、それを契機として英国とシャム中央の条約交渉の機会がもたれ、シャムの政治的な勢力圏構造は1791年段階の基本形を踏襲したものに戻される。以後、シャムとケダーをめぐる国際的なネットワークバランスとしては、多少の「ゆらぎ」はあってもこれが固定型となる。1819年にシンガポールが誕生したことが、さらに大きなネットワークバランスの比重を決定し、ケダーとナコンシータマラートの双方がいれば、より地域的なレベルの交易港として衰退するからである。19世紀半ば以降の脚光を浴びるのは、シャム湾ネットワークのソクラー以下、華人の強い影響力をもつ港市群である。

3. 移民の増加とサムサムの誕生

アユタヤ末期から19世紀前半にいたる約1世紀の間の急激な情勢変化は、支配者である交易中心とそのネットワークのバランスの変化を敏感に反映したもので、決して内陸の住民の状況を反映したものではない。しかし、「海」からもたらされたこの変化は、次第に「内陸」に及び、ケダーの場合それは、北からの移民の増加という形で現れることになる。

(1) 移民の増加

18世紀末から19世紀半ばにかけて、ナコンシータマラート・パタルン・ソクラー・パタ

ニなどの南タイ地方から、ケダーへ或いはパナン領ウェルズレイ地方へかなりの移住者があったと考えられる。その記録は決して多くないが、たとえば1820年代のウェルズレイ地方の人口の急激な増加を示す記録、ナコンシータマラート・パタルンでの正丁数の減少と移住の記録に加え、18世紀末から19世紀始めにかけて、北からケダーへ入植してきた人々の伝承が存在する [Zahrah : 1979]。

これらの人々の移住を促したのは、上記の期間において生じたさまざまな戦乱が原因の一つとなっていると思われる。その戦乱とは、具体的にはビルマによる南タイ蹂躪・東海岸のパタニ王国の反乱と鎮圧・そしてナコンシータマラートによるケダー占領などである。

記録では侵入、占領者が積極的に植民を行ったという形跡はなく、これらの人々の移動は伝承にみるように「新田開発 (ハーナーディー)」を目的とした農民の移住行動や戦乱をさけた難民の移動という形で促進されたと思われる。また、当時の交通ルートの形状から考えれば、ケダーの場合これらの人々は、河川伝いに平野部へくんだり、まだ、相当数あったとおもわれる未開墾地に入植していった。

これら移住民のうち、特徴的な文化要素を持っていたため、その移住の痕跡をおうことが可能な人々がわずかながら存在する。それはたとえば、パタニの方言をはなすマレームスリム、タイ語を話すマレー系ムスリムであるサムサム、そして仏教徒シャム人である。

現在でも19世紀以前に伝承を逆上ることができる一部の村落とその周辺にこれらの人々が特徴的に分布している例がみられる。たとえば、アロースター東南部の平野から河川沿いに丘陵につらなる Pendang 地方においては、1992年8月の調査において、マレー語を話すムスリムとタイ語を話すムスリムとシャム人の仏教徒の村落が地形的にかたよって存在している状況があきらかになった。

もともと Pendang という地域は、アロースターの東南に接する地域で、1911年の人口センサスではアロースター区の一部として構成されていた地域である。水系で把握するなら、ケダー川の南部支流であるブンダン川・パダンプリアン川の流域に属する内陸の開拓地で、区の東部は丘陵・山岳地域となり、その山岳地域はケダー内をパタニ国境から大蛇行して南部へ河口を開くムダ川が丁度国境の山岳地帯を北から南に向かって流れる流域と接する。

Pendang 地方に属する村落の一部は200年以上前にその成立を逆上することができる伝承をもつ。しかし、Pandang 地方に特徴的なのは、まず、内陸の開拓部にマレー・ムスリムが多く住み、山岳・丘陵部にシャム人の部落があるという点である。その内陸のマレームスリムにおいても、サムサムと呼ばれた Thai-speaking Muslims が集住している地域があり、その間に、しばしばパタニ系マレー語方言を話す人々やパタニ出身者を祖先とするマレー人村落が点在するという構造である。ここでは、比較的信用できるもっとも古い人口センサス(1911) [Cavendish : 1911] によって、特にサムサムの場合とシャム人の場合の分布を参照したい。

(2) サムサム

まず、サムサムといわれる人々の像をある程度規定しておきたい。1822年のクローファードのケダー住民に関する記述に、タイ語とマレー語を交えて話し、タイ文化とマレー文化を混在させた形の立場にある人々の話がでてくる。彼らはその言葉と言語故に「混ざった」人々という意味であろうか、「サムサム」と地元のマレー人から呼ばれることになる。また彼らの特徴は、基本的に北のシャムの地域からの移住者であるということである。「サムサム」とその文化に関しては19世紀末の英国探検者が興味をもち、その儀礼や言語に関する短い記

述を残しているが、1955年の初めての学術的な分析にみるように、「サムサム・ムラユ」「サムサム・シャム」など、いずれもタイとマレーの双方の文化の狭間にあり、仏教とイスラムの間に存在するものとしてのイメージが付与されている。

公文書に「サムサム」の名が現れるのは、1910年の英国の Annual Report である。この中でマックスウェルは、クバンパス地方のマレー人の中に「サムサム」との血縁を示すものが多いこと、そのサムサムは多くはシャムとマレーの混血民族で、タイ語の方言を日常的に話し、宗教的にはムスリムであると述べている [Maxwell : 1910]。その規定をほぼ踏襲した1911年のセンサスはサムサムの名を分類項目に加えた唯一のセンサスであるが、その中で現れるサムサム像もその殆どは「Thai-speaking Muslims」として特徴をしめしている。

サムサムと呼ばれる人々が、ケダーにおいて今もなおタイ語していることの背景としてケダーが歴史的文化的にタイ文化の濃厚な影響をもった世界であったことを理解する必要がある。すなわち、ケダーの伝統文化として現在もなお伝承されているものには、現在の南部タイに存在する文化と共通性をもつものがおおい。それは、たとえば、しばしばパタニ文化と共通の伝統をもち、起源を西方のイスラム世界文化に辿ることができるものもあれば、あきらかに仏教・あるいはヒンドゥー的な文化に起源をたどることもできるものもある。これらの儀礼や文化はしばしば現在のタイ国内パタルン、サトゥーン地方の儀礼や文化にも見られるものであり、しばしば仏教とムスリムの文化要素を融合し影響しあった形で伝えられている。

サムサムはこれらの文化の伝播の上でもかなり重要な影響力を持っていたとも考えられる。すなわち、現在でもこれらの残存する文化の担い手はしばしば Thai-speaking Muslims の村落の出身者、あるいはそれと極めて近い地域の住民である場合が多い。1911年のセンサスによれば、これら「サムサム」と呼ばれた Thai-speaking Muslims の人口と分布は、当時の中国人より多く、その居住地域はクバンパス (Kubang Pasu) を中心とした北部に偏っている。

クバンパスには現在もなお、Thai-speaking Muslims の村落が多数存在するが、クバンパス地方においてはその村落の祖先は、18世紀末ころ北から陸路によりパタニの方面から開墾を目的として移住してきたという伝承をもつ。プンダン地方のサムサムの村落の伝承では、村の起源はそれ以上古いと伝えられる。しかし、いずれも18世紀から19世紀にかけての開墾地に村落が存在している。クバンパスのサムサムに関しては、言葉と交通の問題から近年にいたるまでマレー語を話すマレー・ムスリムとの婚姻関係などは殆どみられなかった。しかし、プンダンの例とことなり、同時に近隣のタイ人部落とも殆ど接触をもっていなかった。それは宗教的な理由からであると彼らは説明している。

しかし、とはいうものの1930年代の状況についてラーマンが記述しているように、サムサムはムスリムとしては敬虔なムスリムではないというイメージは近年まで付きまどっていた。ムスリムでありながら豚を食する例や婚姻に際して仏教徒に改宗する例などが知られていたからである [Rahman : 1978]。

これらのサムサムたちは現在のパタルンやサトゥーンなどのタイ南部西海岸部の人々と祖先を同じくするということが考えられるが、サトゥーンにおいては、東海岸のマレー語を話すムスリムとことなり、Thai-speaking Muslims が多いことが知られるが、その Thai-speaking Muslims の一部の村落でも現在も仏教への改宗など、マレーシアムスリムの規範からは考えられない仏教とイスラムの「あいまいな」混住の例が報告されている。

マレーシア・ケダーにおける「サムサム」が敬虔なムスリムとして同化したのは後に述べるように1930年代以降のことであると考えられるので、18世紀末から19世紀にかけてのケダー世界ではマレー世界とシャム世界、ムスリム世界と仏教世界の境界線はかなり曖昧なもので、あるいは、かなり細かい単位で文化的にも入り交じっているために総体としてはいわば「マヨネーズ的」に「水と油が混在するハイブリッド世界」が許容されたと考えられる。マレー・ムスリム、サムサム、シャム人の居住地がブンダンの例のようにある程度まとまった棲み分けに見えるのは、開拓者として後発なものがより条件の悪い土地に住み着いたと考えられよう。

さて、タイ＝マレー間の境界領域の住民である「サムサム」は、その境界性ゆえに、政治的装置として機能することもある。

1839年にシャム人官吏による直接統治政策を放棄したシャムは、ケダースルタンのケダーへの復帰を納め、ケダーをもとの朝貢国の地位に戻したが、同時にケダーを四つの地方に分割し、それぞれにラジャをおいた。これはたびたび反乱をおこしたパタニに対する例（1807年）をひいて、ケダー権力を分散させることで、その反乱の規模を縮小した政策であるとダムロンは解釈しているが、同時にその分割領域をみると、新しく分割された、サトゥーン、ブルリス、クバンパスの三地域はシャムに接した北部よりの地域に固まってケダーから切り取られた形となり、シャムがここにシャム寄りの支配者をおくことで、なおもケダーにシャムの影響力をのこそうとしたことは明白である。以後、サトゥーンは1909年にはシャムの地方として編入され、ブルリスは英領マレー中にありながらもケダーとは別の州となった。クバンパスにおいては1839年以後1863年まではこれもやはりシャム寄りの支配者であるトンクアヌムとその息子の支配下にあり、ケダースルタンの意志が通らない地方であった。

クバンパス地方は地方を南北に縦断してシャムにいたる通商陸路を有している。この道はアロースターとシャムを結ぶ道で、シャムへの朝貢品である金銀樹が定期的にとおった「象の道」である。チャンロン (Chang lung)、ジトラ (Jitra) という駅市はその中継点であり、いずれもタイ語起源の名をもつ街であるが、その周辺には Thai-speaking Muslim の集落が集中している。19世紀後半、この地方には、ト・ナイ・セン (Tok Nai Sen) という Thai-speaking Muslim の地方ボスがいて、地域の支配に大きな影響を及ぼしていたといわれる。ト・ナン・センのケダー統治体系における地位はブンフル・ブサル (Penghulu Besar) であり、チャンロンから・ジトラにいたるひろい地域を管轄していた。ト・ナンセンについては、彼の子孫が居住しているトピンを中心に、良い伝説も悪い伝説も存在するが、その中で権力者としてのトナイセンは「象の道」を中心として自らも象をもち、シャム・ケダー間の交易や盗賊行為などに従事し、朝貢品の貢納にあたって道中の安全保証にかかわっていた。

伝説に登場するト・ナン・センには、盗賊が跋扈し、治安の悪さで知られていたクバンパス地方のイメージと、シャム・マレー双方の世界の住民であり、ムスリムでありながらもシャムの呪術的力をあわせもつ「おそろしくも強力な」存在としてのイメージが付与されている。

すなわち、権力者としてのトナイセンには、スルタンというより上位の権力者と庶民、シャム的なものとマレー的（ムスリム）的なもの、土地の生まれのものでありながら、遠方とも繋がりをもつもの、または「善」にして「悪」というすべてにおいて両義的な媒体者としてのイメージがつかまとう。したがって、同じ両義的なはざまの人々としての共感をもつ Thai-speaking Muslim の人々からは土地のヒーローとしても認識されている。[西井：1992]

クバンパスのサムサムの場合は、その両義的な役割を期待して象の道の周辺に住居が固め

られたという説もあり、この「はざま」の人々の果たした役割はその意味で、ケダーとそれを宗主国として管轄するシャムが、「曖昧な」存在としての「サムサム」を極めて巧妙な政治装置として利用した例といえる。

(3) シャム人

ケダーにおけるシャム人の人口や居住地を特定できる記録は極めて少ない。シャムがケダーの宗主国であった1890年、シャムの南部大臣（カラーホーム）の要請により、ケダースルタンが、ケダー内のシャム寺院の僧侶とその寺男のリストとその居住する村の記録を作成し提出したその写しが、スルタンの保管文書中に在する。それによれば、登録された寺院は13。僧侶の数は86人を記録している。寺院はその多くが Pendang 地方にかたまっていた。寺院が抱える僧侶の数でもっとも多いもの、すなわち大きな寺院はこの時点でラムディン寺院で22人を抱える [National Archives of Kedah 1991]。

寺院が存在するためにはその寺院と僧侶を物質面で援助する、隣接するシャム人村落の存在が不可欠である。1911年のセンサスからは、ムキム単位ごとのシャム人人口を割り出すことができるが、その分布は先の僧侶と寺院の分布状況をほぼ裏付けるもので、各ムキムの立地条件を考慮にいれても、Pandang 地方の山岳・丘陵部におけるシャム人人口のきわだった多さをうらづけるものである。1985年のケダーの仏教協会に登録されたシャム寺院の所在はケダーの全域にわたっており、現在では仏教協会の中心はアロースターに置かれているが、1911年センサスから考慮すると、19世紀のシャム人村落はムダ川中流域を中心とした流域におおく、Topping の19世紀始めの記録にパタニからの難民（シャムとは限らぬ）が多くムダ川流域に住み着いているという記録とも一致する。したがって、この場合、シャム人は多く山岳を越えて、内陸・東海岸のパタニ方面から移住する経路を取っていたという推論ができる。そして、ラムディン、ティティアカルといった丘陵部の寺院がシャム人集団の中心的存在であったと思われる。先のマレー人集落やサムサムの集落の分布からみると、この Pendang 地方においてはもっとも後にやってきた移民集団であり、耕地としてはもっとも条件が悪く、このあたりがもっとも開拓が後発であったとおもわれる。

(4) パタニ・マレー

サムサムとケダー・マレーが混住する地域にときたま特にパタニ方言を色濃く残すといわれるマレー・スメリムの村が存在する。これはまた、Pandang 地方がパタニの移住者と関わりを持っている証左でもある。また、前者のあげたサムサムやシャム人が移住してきた時代に降にはパタニからさらに移住者がやって来ていることをもしめす。

Pandang においては、サムサムの部落においてもパタニとの関わりを示す伝説がのこる。クボール・パンジャン村 (Kg. Kudor Panjang) とその近隣のプルポック村 (Kg. Perpok) はパタニ出身の英雄ト・モーリス (Tok Moh Ris) の伝説で有名だが [Yaacob 1983], 本に報告された伝説の別バージョン [Cek Fatimah bt Isa, 58, born at Kg. Kubor Panjang, interview, August 1992] では、ト・モーリスはパタニ人の親族をもつが、自身は土地の人間でタイ語を話す人物として理解されている。またこの伝説では、兵士として侵入してきたシャム人をト・モーリスが多数殺して埋めたというモチーフが語られており、移住民としてではなく兵士としてのシャム人に対する反感が見られる。シャム人に対する反乱というモチーフは具体的に1822年のナコンシータマラートによるケダーの侵入占領事件を指す。最大の戦場と

なったランガー (Langgar) を中心とした地域には、シャム人兵士がマレー住民を捕縛し、ナコンシータマラートあるいはバンコックへ捕虜として送り出した事件を村の昔話として古老が伝えている。

すなわち、ゆるやかな開拓移住としては、ケダー・マレー、サムサム、シャムが混住する例があるが、侵入者としての「シャム」は別のイメージを持つということでもある。むしろ、クボール・パンジャンのト・モーリスのサムサム説は、サムサムもその当時すでにケダー住民とし、ムスリムの一員として存在したことを強調する意味をもつとも考えられる。

この事件が、ラムディン周辺のシャム人の存在とどう結びつくのかは現在のところ手掛かりがない。しかし、ラムディンのシャム人が侵入者としてのシャムと同一視されたという証拠もまた現在のところはない。

4. 「領域国家」のもとで

ケダーは、1911年にシャムの朝貢システムを離れ、英国領マラヤに編入された。これは、この地域の人々が近代的な意味での「領域国家」の中に組み込まれたことを意味する。前述のセンサスは、それに伴う人口把握のための措置であり、この中で「サムサム」の名前が登場しているのは、当時「統治者」英国にとって、かれらがひとつの民族集団として認識されるだけのまとまりをもっていたことを示す。しかし、この時点ではそれは「サムサム」を民族として固定化するものではなく、またケダーのすべての住民に自らの民族的な帰属意識の決定をうながすものではなかった。「国境線」が固定されたことの意味は、すぐに劇的な変化となつては表れてこなかった。それは、まず最初に、1920年代から30年代にかけてのケダーが抱えていた問題である「山賊・強盗の跳梁に対する治安問題」解決の過程のなかで、あるいは、土地所有者としての資格問題のなかでクローズアップされてくる。その中で、人々は自らが「何物であるか」を公的に規定されていくのである。

(1) 「境界」の人々

チア・ブン・ケン (Cheah Boon Kheng) は、*Peasant Robbers of Kedah, 1900-1929* の中で、19世紀後半から1930年代にかけてのケダーの治安状態の悪さと盗賊の跳梁には、「宗主国」シャムの管理体制のあいまいさ、警察組織の貧弱さ、辺境 (国境) 地域という地理環境、社会経済的に未熟な開発状況、そしてシャム＝ケダー間の「サムサム」人口という要素が関わっていると述べる [Cheah 1988]。

牛泥棒を主とする盗賊は、警察権力が国境線を越えることができない状況を利用することによって、シャム＝ケダー国境をしばしばこえて活動した。シャムとケダーの双方の警察の間で協力体制がとられるようになった1936年まで、とくに1922年から1929年には、その被害状況は深刻であった。「無法地帯」としてのケダーのイメージはこの時期以降、第二次世界対戦期以降も引き継がれることとなる。

チア・ブン・ケンがあげている当時の盗賊には、実像をこえて伝説的な英雄として語り継がれているものがある。ケダーの村々の農民英雄伝説には、為政者・権力者への村人の抵抗の意味が付与され、彼らが農民の側に立っていたものであることが強調されているが、同時に注目をひくのは、彼らの出自がしばしばなんらかの形でシャムとのかかわりをしめしていることである。すなわち、Awang Poh と Salleh Tui は Tui (Satun) からきた、サムサム

であり、Din Prum はシャム人である。マラヤのロビンフッドと言われ、かずかずの英雄伝説をのこしている Nayan は、マレー人であるが、上記の三人と同じく活動範囲は Kubang Pasu, Padang Terap, Kota ster, Pendang といった、いずれもサムサムとシャム人人口が特徴的な地域である。また、これらの「農民英雄」には「呪術」あるいは「超自然的」な力があると語られている面など、しばしばクボール・パンジャンの英雄ト・モーリスの場合のように、「シャム」的なものと結び付けられていた。

これらの「盗賊」が国境線を越えて活動していたことは、権力からの追及を逃れる手段としてだけでなく、当時のケダールの人々の伝統的な生活圏が、いまだに国境線を越えたものであったことをしめしている。また「盗賊」といった例だけではなく、南タイの農民がケダールへ定期的に季節労働者としてやってきていることも見過ごすことはできない。すなわち、ケダール平野における、稲の種まきと刈り入れの際には、パタニ、クランタン、サトゥーン、ソクラーからのマレー農民の季節労働者としてのでかせぎが慣例となっている。アロースターからケダール川をさかのぼって、クアラ・ヌラン (Kuala Nerang) を経て、ドリアン・ブルン (Durian Berung) にいたる山越えの路は現在は閉鎖されているが、長らくパタニの農民が季節労働のためにケダールにくる道として利用されていた。公的な記録に残っているものとしては、ごく最近では1950年代にパタニ、クランタン、ソクラーから特別ビザを発給して約5000~8000人のタイ国籍農民を定期的にうけいれており、そのほとんどがムスリムであった³。[IMM/NMF/76/53]

こういった農村の人々にとって、シャムからの来訪者は身近ではあったが、「シャム」のイメージは、とくにマレー・ムスリムの農村の人々にとっては異質なものを含んでいた。すなわち、「異教的なものとしての呪術」「無法者」としてのイメージは、シャム的なものとして、ある意味では等しくそのカテゴリーに属する「サムサム」と「シャム人」に付与された。特にサムサムは「異教的」=「敬虔ではないムスリム」としてイメージを払底することができず、1930年代の土地所有者法により、「土地を所有できるマレー人」として自らを「マレー・ムスリム」とする道を選んだ。この法律は、最終的な大量移民者である中国・インド系の人々をいわば排除する意味で制定されたが、その過程で「古くからその土地に住んでいる人々」にも自らのアイデンティティの撰択をせまるものであった。なお、ケダール・ブルリスのシャム人については、シャム政府の「古くからの住民」であることの指摘をいれて、その権利保全が法的には約束された。

(2) 「新しい村」と「Wan Lamdin 焼失事件」

ケダールの治安状態を不安定なものにしていたのは、ケダール国内の事情だけではなく、国境を接するタイ南部のマレー・ムスリムによるタイからの独立運動、そして国境地域を主な活動域としていたマラヤ共産党の活動によるものもあった。ムスリムとしての独立を目指すパタニのマレー・ムスリムの運動に関しては、公的に介入することができなかったが、共産党対策として、1950年代に実施されたのが「新しい村」政策と呼ばれるものである。これは、山間にコミュニティを作っているコミュニストを孤立させ、支援を断つために、主に山間の村の人々を強制的に移住させ、電気、水道などの整ったより町に近い地域におくことである。全国的には480の「新しい村」がつくられ、57万人あまりの人々が集められ、その86パーセントが中国系であったという。

しかしながらケダールにおいては、「新しい村」への強制移住には国境地帯のかなりの数の

シャム人の村落をも含んでいた。それは、多くのシャム人の村落が山間のわずかな耕地を中心とした、より国境に近い地域に存在していたことと、その政策が「貧民対策」であり、当時のシャム人の状態が極めて貧しいとの報告がなされており、なんらかの対策が必要とされていたという理由による。

すなわち、1953年の報告によれば、ケダーの他の民族、マレー、中国、インドの人々がそれぞれ民族語小学校をもっているのに対し、ケダーの古くからの住民であるシャム人にはシャム寺院で私的におこなわれているタイ語学校しか存在しないことなど「貧民対策」が強調されているのである [SUK/Sec 824/68]。住民の強制移住に関しては抵抗も大きく、移住も拒んで動かない村落もあり、あるいは、移住させたあとで住民が逃げかえってしまった例もある。

この「新しい村」への移住と再編成の中で、ドリアン・ブルンのような古くからのシャム＝ケダーの交易路や拠点が失われていった。たとえば、ケダーに存在するタイ寺院の中でもっとも古く、19世紀末にはもっとも多くの僧侶を有していた Pendang の Wat Lamdin とその北部にある Wat Titi Akar の周辺の小高い地域はおそらくケダーにおける最初のシャム人の村落であった可能性がある。

この Wat Lamdin も新しい村政策によって移住を命ぜられていたが、周辺住民と僧侶がそれを拒んでとどまっていた。しかし、1853年、この地に到着したマレー人兵士の小隊は、寺がコミunistの巣になっている、という理由で、僧侶以下の制止を振り切ってこれに火をかけ、寺は焼失した。

この事件を重くみたペナンのタイ国領事からの報告でタイ国からも正式な抗議があり、結果としてマラヤ政府はタイ国に謝罪し、焼失した寺の財産を弁償することで決着がついたのである [SUK/1916/72]。

事件の詳細を眺めれば、寺の敷地内にある僧侶の居室からみつかった毛布や米をみて、僧侶の居室をそのまま礼拝所とみたマレー・ムスリム兵士が寺をコミunistの補給所となっていると判断したことから生じた誤解のようである。コミunistは多く中国系の人々であり、仏教徒＝中国人という判断が働いたのかもしれない。

(3) マレー人とシャム人

現在のケダー州における、サムサムとシャム人の状況について概観するならば、まず、ケダー州において「ムスリム」の敬虔さが強調されるようになったことで、伝統芸能を含む「非イスラム的」なすべての要素が排除される傾向が続いている社会的な状況を考慮する必要がある。

そのなかで、19世紀の英国官吏が「サムサム」と呼んだ人達は、日常語として、タイ語を話すこと以外のほとんどすべての「サムサム」的な要素を忘れ去ろうとしている。「マレー・ムスリム」であることを撰択した彼らが強調するのは、交通手段とマレー語教育の普及により、閉鎖的村落であったかれらの環境が開かれたことである。すでに若い世代では、言葉の問題も克服されている。

しかし、反対にシャム人の状況をみれば、イスラムが強調されることで、「非イスラム」であるシャム人とマレー・ムスリムとの村落レベルでの交流が減少していることが伺われる。「非イスラム的」な文化要素に対する規制はシャム人部落で行われる冠婚葬祭に親交のあるマレー・ムスリムが参加することをも難しくしている。また、マレーシア国籍をもつシャ

ム人の若い層は、寺院におけるタイ語教育を受けてはいるもののマレー語を使う機会が圧倒的に多いことから「タイ語離れ」が進んでいると、言われる。

おわりに

現在のマレーシアにおいて、民族問題といわれるものは、ほとんど自動的に、マレー人・中国人・インド人間の問題を指している。事実、英国植民地から「国民国家」としてのマレーシアに生まれ変わる過程でも、この三つの民族以外の民族集団のかかえる問題については、マレーシア政府はほとんど心配りをする余裕をもたなかった。「国民国家」の創設は、それ以前の伝統的な国家構造の上に明確な線引きをすることではじまったが、それは、これら伝統的な構造のもとにあった人々に、政府的にまたは文化的に彼らのアイデンティティをなんらかの形で規定し、決断しなければならない一瞬を迫るものであった。

ケダー州においては、前近代的構造の特徴をもっとも体現していた二種類の人々、すなわちサムサムとシャム人という Thai-speakers が、イスラームあるいは、非イスラームというキータムによって同化・または異化への道を選んだ。マレー・ムスリムとしての同化がほぼ完了しつつあるサムサムがマジョリティへの道を選んだのに対し、シャム人はマレーシア国籍をもつ異民族、すなわちマイノリティへの道をえらばざるをえなかった。その結果彼ら同士の関係も、現代マレーシアのかかえる典型的な民族問題を反映したものにちかづきつつある。サムサムもシャム人も彼らの日常語であるタイ語を使用する機会がますます減少しており、若い世代のサムサムはマレー語を日常語としている。その過程と教育・交通手段の普及は見事に一致している。すなわち、これら Thai-speakers の減少と消滅の過程は、「フロンティア」世界としてのケダー世界の消滅の過程をも意味しているのである。

注

- 1 同時期のタイ史料では、ラゲーはシャムの内陸の地方国パタルンの支配範囲として認識されており、トランについては1809年までタイとケダーの双方の概念的な支配下にあり、その管轄ははっきりしない。タイ史料では、トラン川の右岸がタイの勢力圏の境界であったとされる。

[National Library of Thailand. (1971)

Cotmaai het Ratchakaan thii 2 C.S. 1173: (Ratanakosin Paper Rama 2 the year 1173).]

- 2 ナコンシータマラートやパタニが属する東海岸のシャム湾交易圏がアユタヤ中期より比較的安定的な交易圏であったのに対し、西海岸のマラッカ海峡北部交易圏はいささか不安定でその重心が可動的である。その重要な港市はケダー、タラーン、スマトラのアチューと深くペグーからテナセリム沿岸をくだる南ビルマ沿岸である。アユタヤがビルマ南部に勢力を有していた間は、テナセリムなどもアユタヤのインド洋側外港群として機能した。17世紀にはスマトラのアチューがもっとも重心的な交易港であったが、アチューの衰退後、18世紀後半には重心はシャムの唯一の直営交易港であるタラーンに移り、ケダー・タラーン・アチューという交易ルートを形成していた。この構造は1768年にアユタヤがビルマの攻撃で崩壊したのちも重要性を減じることはなく、むしろ、一時的にシャム勢力が衰退した間に、ケダー王族の一人がタラーンに根拠地を築こうとして

遠征したという記録がある。[黒田：1991]

- 3 ケダー＝シャム間のこういった定期的な農民の移動は結局のところ両国の経済格差に左右されることはいうまでもない。1992年のクバンパスにおけるききとり調査では、ケダーの水田にコンバインが導入されるまでの70年代以前は、タイからのこういった農業労働力が不可欠であり、主な地域で受け入れ人数の分配が行われ、かれらを求める農地に配分するブローカー、さらにそれぞれの農村での受け入れ係りが存在していた。しかし、コンバイン導入と粃の直撒き方式がはじまったことで、ケダー側の受け入れ人数は激減し、いまでも彼らの受け入れをしている地域はわずかとなっている。

参考文献

Ahmad, Y.

1983 "Pahlawan Tok Mo Ris". *Beberapa Aspek Sejarah Kedah*. Kuala Lumpur, Perastuan Sejarah Malaysia.

口羽 益生, 坪内 良博, 前田 成文

1976 『マレー農村の研究』. 京都, 創文社.

Cavendish, A.

1911 *Report on the Census of Kedah and Perlis A.H. 1329 (A.D. 1911)*. Penang.

黒田 景子

1991 「タラン港の破壊—ラーマ1世期 (1785-1808) におけるマレー半島北部西海岸交易港群の役割」. 『南方文化』18 (天理南方文化研究会) : pp.56-81.

西井 涼子

1992 「周辺における権力とエスニシティ：タイマレーシア国境のサムサム」. 『民族学研究』57-3 (Tokyo) : 318-344.

清野 正義

1993 「国民国家と国境概念」. 『立命館国際地域研究』4号 : 81.

Giddens, A.

1985 *The Nation-state and Violence*. Polity Press, UK.

Kedah, National. Archives. o.

1949 "Speech of Che Hanapi". SUK/Sec 824/68.

Kedah, National. Archives..

1953 "Petitions against the Burning of Wat Lamdin & Wat Pakhca Naka by Malay Soldiers". SUK/Sec 1919/72.

Kedah, National. Archives.

1991 "Kepada Phaya Pering Fasal Hantar Lis Banci Sami-sami di Kedah Ini". *Sulat Menyurat Sultan Abdul Hamid*. 2:

Kedah, National. Archives..

1992 "Perkara Pemetong Padi Negeri Thai dan Kelantan:Padi Harvesters 1910-1960". IMM/NMF/76/53.

Kheng, C.B.

1988) *The Peasant Robbers of Kedah 1900-1929:Historicla and Folk Perceptions*. Singapore,

Oxford Univ. Press.

Maxwell, W.G.

1910 *The Annual Report of Adviser to the Kedah Government for the Year of 1327 (A.D. 1910)*. Kuala Lumpur,

Mohamad, Z.b.H.

1979 "The Evolution of Population and Settlement in the State of Kedah". *Darulaman; Essays on Linguistic, Cultural and Socio-Economic Aspects of the Malayan State of Kedah*, 120-153.

Rahman, T.A.

1978 *Viewpoints*. Kuala Lumpur, Henemann Educational Book (KL).

Sii Woorawat, L.

1964 *Phongsawadaan muang Phatthalung*: '(Chronicle fo Phatthalung). (Bangkok):

Stargardt, J.

1983 *Satingpra: The Environmental and Economic Archaeology of South Thailand*. Singapore, ISEAS.

Thailand., National. Library. o.

1971 *Cotmaai het Ratchakaan thii 2 C.S. 1173*: (Ratanakosin Paper Rama 2 the year 1173). (Bangkok):

Wan Yahya, W.M.

1979 *Salasilah atau Tarikh Kerajaan Kedah*. (Alor Setar):

Thai Temples in Kedah and Perlis

